

CLF

同志社大学 学習支援・教育開発センターレポート REPORT

Center for Learning support and
Faculty development

Vol.

37

2026.3

CONTENTS

ページ

02 開催報告

新任教員研修会

TA研修会

FD研修会

03 学部・研究科・センター等FD活動報告

(神学部・神学研究科、スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科、脳科学研究科)

04 2025年度部会活動報告

教育方法・教材開発費制度について

教育開発調査活動費制度について

05 学外企画参加報告

大学入学準備講座

06 2025年度学生調査報告

08 ラーニング・コモンズ活動状況

12 Column「AI時代における学び」

学習支援・教育開発センター設置の趣旨

本センターは、本学における全学的な学習支援施策の企画及び実施、
全学的な教育施策の企画及び開発、
教育活動の継続的な改善の推進及び支援により、
大学教育の充実と発展に寄与することを目的として設置されています。

開催報告

新任教員研修会

本学教員として教育・研究活動に従事していただくうえで、ご理解いただきたい事項の認識を深めていただくことを目的として、毎年度新任教員研修会を実施しています。

2025年度は、新任教員約40名の参加がありました。また、後日オンデマンド配信も行いました。

日時 2025年4月2日(水) 13:00～16:40

場所 (今出川) 良心館103教室

内容

各所管の機構長、所長等から各内容について説明していただきました。

- ①ガヴァナンス、意思決定の仕組み
- ②キリスト教主義 ③教育活動
- ④グローバル化の取組 ⑤学生支援体制
- ⑥研究活動 ⑦入学試験業務
- ⑧教育・研究倫理

受講者の声

(終了後アンケート結果より一部抜粋)

大学の組織体系について把握することができた。

本学と海外の大学との関係、また外国人留学生に関する貴重な情報を伺うことができた。

SDA 室の存在や、その支援体制に関する情報は非常に有益であった。



新任教員研修会

本学が掲げるキリスト教主義についての理解を深めることができ、大変有意義な機会となった。

研究倫理はとても重要なことであることを、改めて再認識した。

研究の手厚いサポートがあり安心して研究が出来ると感じた。

TA研修会

ティーチング・アシスタント(TA)に任用される大学院生(予定者を含む)を対象として、TA 制度の定義・目的、TA の業務内容、心得、キャンパス・ハラスメントの防止、TAの事務手続き等について説明する研修会を2011 年度より実施しています。

2025年度は昨年度に引き続きオンデマンド配信にて実施しました。

研修会動画・資料は以下サイトで公開しています。

TA研修会 <https://clf.doshisha.ac.jp/clf/ta/ta.html>



TA研修会の様子(文系研究科向け)



TA研修会の様子(理系研究科向け)

FD研修会

2025 年度は本学教職員を対象とした FD 研修会を以下のとおり実施しました。

文化情報学部科目におけるオンデマンド講義の活用事例

昨年度から導入された新たな学年暦における 180 分のオンデマンド授業を、先生方がどのように活用されているか、文化情報学部での事例を報告していただきました。

配信期間 2025年3月24日(月)～2026年3月31日(火)

講師 阪田 真己子 氏 (文化情報学部 教授) **開催** オンデマンド配信



どうする？アセスメント・ポリシー ～学習成果の実質化をめざして～

「同志社大学アセスメント・ポリシーの策定に関する基本方針」が改正されたことを受け、各学部・研究科等で定められている現行のアセスメント・ポリシーの見直し、再策定の参考になる研修会を開催しました。認証評価を通じて求められている大学の説明責任と、内部質保証推進体制について再確認しつつ、学習成果の実質化に向けた評価ツール・指標を選定する際の視点やそれらを活用して具体的に評価をおこなう際の考え方についてお話ししました。

日時 2025年10月2日(木) 10:45～12:15

開催 対面:(京田辺) 恵道館104教室

講師 篠田 雅人 氏 (学習支援・教育開発センター 助教)

オンライン:Zoomによるリアルタイム配信 ※後日オンデマンド配信



ラーニング・コモンズでの学習相談から見える学生の傾向 ～授業改善の参考に～

良心館ラーニング・コモンズおよびラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズのアカデミックサポートエリアでは、学生からの学習相談に応じています。今後の授業計画に役立てていただけるよう、相談内容を通じて見えてくる、今の学生が抱える学習上の不安についてお話ししました。

日時 2025年11月17日(月) 13:10～14:20

開催 対面:(今出川) 至誠館32教室

講師 小野 慎司 氏(学習支援・教育開発センター 教授)
趙 智英 氏(学習支援・教育開発センター 助教)

オンライン:Zoomによるリアルタイム配信
※後日オンデマンド配信



理工学部科目におけるオンデマンド講義の活用事例

昨年度から導入された新たな学年暦における 180 分のオンデマンド授業を、先生方がどのように活用されているか、理工学部での事例を報告していただきました。

日時 2026年2月10日(火)～2027年3月31日(水)

講師 小坂 隆浩 氏(理工学部 情報システムデザイン学科 教授)
鈴木 将之 氏(理工学部 電子工学科 教授)
中村 守正 氏(理工学部 機械理工学科 教授)
田原 義朗 氏(理工学部 化学システム創成工学科 准教授)
浅岡 正幸 氏(理工学部 数理システム学科 教授)

開催 オンデマンド配信



教育はAIにどう対処すべきか

生成 AI が提供する汎用的で高度な人工の推論能力によって、これまで大学で行われてきた知識・技能の教授方法等は、再考や変化を求められはじめています。本研修会では、現状把握や利活用のベストプラクティス共有を目的として、AI の仕組みとリスク、これまでの社会的対処と基本的な考え方、今後の見通しと授業課題の設計などについてお話ししました。

日時 2026年3月9日(月)～2027年3月31日(水)

講師 上浦 基 氏(高等研究教育院 教授)

開催 オンデマンド配信



学部・研究科・センター等FD活動報告

神学部・神学研究科

2025年度の神学部FD研修会では、2024年度の卒業時調査の分析をもとに神学部での学びの長所と課題を共有した。神学部では、学びの実態調査の経年変化をグラフで可視化し、全学平均に対し、大きくプラスの項目は神学部の長所、マイナス項目は神学部の課題と考え、教員間で共有を図っている。2024年度も、異文化の知識や異文化の人々と協力する能力の獲得に關しての満足度が高く、授業での質問の頻度が全学平均より著しく高かった。これは、多様な宗教、言語を学べる神学部のカリキュラムや少人数学部ならではの学生と教員の近さを反映しており、今後、更に伸ばしたい点である。他方で、本分析で明らかになった数量的分析能力の獲得などの課題については、その重要性をしっかりと受けとめ、改善に向けた取り組みを進めていく予定である。2025年度よりスタートした神学部新カリキュラムの充実のためにも、学生の声が届くアンケート解析は重要である。神学研究科FD研修会では、日本基督教団の神学校でもある本学として、近年の教会志願者の減少に鑑み“一人でも多くの教会志願者を”とする教団からの求めに応じるべく、教会教師の育成についての本学の課題を共有し、自由に意見交換を行った。

スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科

2025年度は、学部FDと研究科FDを1回ずつ実施した。学部FDでは、早稲田大学スポーツ科学学術院の林直亨教授を講師として、Zoomによるオンライン会議形式で『早稲田大学スポーツ科学部における初年次教育の改革』と題した講演を実施した。初年次教育に関する早稲田大学スポーツ科学部の教育改革はアカデミックスキルの体得を目指した「学生の主体性や対話力を育む工夫」であり、それについて出席者一同興味深く拝聴し、講演後の質疑応答により理解を深めることができた。

研究科FDでは研究開発推進機構URAの浦田穰司氏を講師として「オープンアクセスのすすめ～ハゲタカジャーナル対策と投稿先の探し方～」と題し、研究科FDの位置づけではあるが、研究者全般に關連する議題であるため、研究科メンバーに加えて教授会メンバーも対象として対面で実施し、オンラインを併用して大学院生の参加も可とした。出席者一同、講演および質疑応答により、学術論文等のオープンアクセス政策の現状、サイトスコアやインパクトファクターの確認方法、正しい投稿先の選び方やいわゆる「ハゲタカジャーナル」の見分け方等について理解を深めることができた。

脳科学研究科

脳科学研究科における教育環境の質向上を目的として、大学院生の教学・研究環境における生成AI利用の在り方を中心にFD活動を実施した。まず、生成AIに關する専門家の講演動画を視聴し、教員間で意見交換を行った。その結果、文献検索やアイデア創出など補助的活用を認める意見がある一方、研究倫理・著作権・過度な依存への注意を含むリテラシー教育の必要性が共有された。生成AIは急速に変化するツールであることを踏まえ、今後は研究科内での事例共有を進め、学生支援と教育の質向上を最優先としつつ継続的に状況を把握していく必要があることを確認した。

2025年度部会活動報告

FD支援部会

●設置の趣旨

教育内容、授業方法の改善を推進するとともに、教育効果に関わる全学的な企画の検討を行うことを目的として設置しています。

●活動報告

今年度の本部会では、まず、文部科学省が主体となって実施する全国学生調査の参加方法や調査項目の対応、調査結果の公表について共有しました。既に行っている本学の学びの実態調査との質問項目の重複、学生の回答負担などを考え、今後本学の学生調査の質問項目の見直しが必要と考えていますが、本格実施となる2025年度は、文部科学省が実施するインターネット（WEB）調査を利用することとしました。また、調査結果の公表を行う方向で検討することとしました。

次に、2026年度に導入予定の、学修成果を基軸とした教学マネジメントシステムについて議論しました。DPIに掲げる資質・能力を学生が獲得できているかを把握するためのシステムとして、提供すべき情報や、測定（計算）方法、システム上での見せ方について、様々な意見があり、それらの意見を整理し、システム開発業者や学内関係部課と調整を行いながら、システムの仕様を確定しました。

その他に、「教育方法・教材開発費」について、今年度はA区分に1件の申請があり、審議を行いました。

学習支援検討部会

●設置の趣旨

本学における学習支援活動および学習支援環境（ラーニング・コモンズ等）の運営方法を検討することを目的として設置されています。

●活動報告

本部会では、ラーニング・コモンズの入室者、各エリアの利用者数、学習相談件数、学習支援コンテンツへのアクセス状況、アカデミックスキルセミナーの開催状況等について報告しました。

これまで「ラウンジ」としていたラーネッド記念図書館1階のスペースを、2025年度より「ラーニングコート」という名称に変更し、学習スペースとしてラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズと同一のルールで運用することにしました。この対応により学習で利用できる席が24席増えることとなりました。

良心館ラーニング・コモンズについても、アカデミックサポートエリアの老朽化した什器の入れ替えを行い、より良い環境を提供することができました。

サービス向上の面として、学生調査での自由記述でも一定数要望がある、授業開始時間前にラーニング・コモンズを使用したいという意見を踏まえ、開室時間を9時から8時30分に前倒しにすることについて懇談いたしました。この点については今後も検討を進めてまいります。

なお、昨年度に引き続き、ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズでの学習相談の利用が大幅に減少しています。AIの利用をはじめとする、学生の学習行動の変化についても様子を見ながら、両校地ラーニング・コモンズにおいて引き続き安定的でより良い学習環境を提供できるよう努めます。

教育方法・教材開発費制度について

本学における授業改善をさらに促進するために、専任教員を対象として、新たな教育方法および教材開発に必要な費用全般を補助する「教育方法・教材開発費制度」を設置し、毎年度秋学期に次年度の開発費の申請を受け付けています。

申請区分には、より多くの教員の教育改善に向けた取り組みを奨励することを目的とするA区分と、将来的に全学または学部・学科・研究科・センターレベルの教育改善に波及効果が期待できる取り組みを支援することを目的とするB区分があります。

2026年度はこの制度を利用して以下の取組みが行われます。

区分	開発テーマ	申請者
A区分	デジタルストーリーテリングを活用したProject Based Learning方法論の開発 ：ノーコードで構築する横断型デジタルアーカイブ教材	（文化情報学部）大井 将生

本制度を利用して開発された教材の一部は、本学オープンコースウェア上で公開しています。

教育方法・教材開発費制度
<https://clf.doshisha.ac.jp/clf/support/development/materials.html>

同志社大学オープンコースウェア
<https://clf.doshisha.ac.jp/clf/opencourse/opencourse.html>

教育開発調査活動費制度について

本学の教育の質的向上のための積極的な調査活動を支援するために、専任教職員を対象として、教育開発に関する各種学外企画の参加に必要な旅費・参加費等の費用補助を行う制度を設けています。補助対象となる催しは本センターホームページ等で紹介しています。

教育開発調査活動費制度
<https://clf.doshisha.ac.jp/clf/support/action.html>

学外機関主催研究会・研修会
<https://clf.doshisha.ac.jp/clf/research/research.html>

学外企画参加報告

SPODフォーラム2025（2025年8月27日～29日）

報告者：法学部・法学研究科事務室 和泉 成彦

学習支援・教育開発センターの「教育開発調査活動費制度」を利用し、「SPODフォーラム2025」に参加した。本フォーラムは2025年8月27日から29日にかけて開催され、全国の大学教職員が集まり、FD・SDおよび学生支援に関する最新の知見を共有する場である。今年度のテーマは「学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくり」であり、北海道から沖縄まで全国120以上の高等教育機関から延べ1,500名以上の参加があった。3日間という短い期間で多様な知識を得ることができ、かつ職場で活用できる実践的なノウハウを学べる貴重な機会であった。

参加目的は、所属する学部事務室でも課題となっている「内部質保証」「大学IR（特に教学IR）」「学修成果の可視化」等の理解を深めると同時に、大学の役割や組織の成長を俯瞰する視点を養うことである。また、日本のトップリーダーによる講演を通じて、文部科学省が発信する「知の総和」答申が現在何を求め、どの方向に進んでいるのかを理解することも目的の一つであった。

今回参加したプログラムは、「教学マネジメントー内部質保証に寄与する学生参画の実践とは」「大学IR入門ー意思決定を支援する実践」「卒業時の学修成果の可視化と内部質保証」「現代の社会課題と大学の役割」「学び続ける事務組織と実践する職員の育て方」「学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくり」「情報交換会」「教学IRにおけるデータ分析入門」「40代からのキャリアデザイン：リスキリングで未来を拓く」などである。各プログラムには事前課題（指定図書の理解、動画視聴、自大学の状況調査等）があり、1日3プログラム（10時から18時まで）を3日連続で行う厳しくも充実した内容であった。

各研修プログラムにおいては、少人数・対面開催ならではの活発な交流があり、また講師との距離が近いことから、業務に関する具体的なアドバイスを得ることができた。特にIRや学修成果の専門教員である竹中喜一氏や真鍋亮氏とは、本フォーラム会場までの徒歩約30分の道のりや情報交換会とともにし、目の前の業務課題である「学修成果の可視化」について助言をいただいた。現在も、他の研修等でお会いした際には相談にのっていただくなど、継続的な関係を築いている。

今回の参加を通じて、FD・SDおよび他大学との人脈構築の有用性を再認識するとともに、業務推進に資する新しいアイデアを得ることができた。特に、法学部で進めている「学修成果の可視化」に関して、認知能力だけでなく非認知能力や課外活動を含めた評価方法、ポートフォリオ導入の可能性、さらにこれらが大学に求められる背景と今後の動きを理解する重要性を強く感じた。次年度もSPODフォーラムは開催予定であるため、継続的に参加し、学部教学の環境改善、ひいては学びの質の向上に寄与していきたい。

最後に、本制度を通じて、このような貴重な機会を提供いただいた学習支援・教育開発センター、そして多忙な業務環境の中で研修へ送り出してくれた法学部・法学研究科事務室のスタッフに深く感謝する。

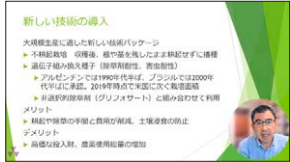
大学入学準備講座

高校生を対象に、大学における必要な学力レベルを知ってもらうこと、正しい学部選択の機会を与えることを目的とし、「大学入学準備講座」を開講しています。本学教員がそれぞれの専門分野で扱う学問の内容から高校生が興味を持ちそうなテーマを選んで、大学で実際に行われる授業と同じ形式で高校生に講義を行っています。

2025年は対面とオンデマンドで開催し、対面の講座には440校から、オンデマンドの講座には263校からの申込がありました。



対面講義の様子



オンデマンド講義の様子

😊 受講者の声（対面参加者分より）

大学の授業のイメージが湧き、今後の勉強の励みになった。

先生の率直な意見や考えを聞くことができた貴重な体験でした。

講義を受けてこの分野を大学で学びたいという気持ちがより膨らみました。

普段高校で学ぶことのない、新鮮な視点から講義を受けることができて良かった。

今の段階では理解が難しいと思ったからこそ、詳しく学びたいと思った。

これを機に大学受験より頑張ろうと思います!!

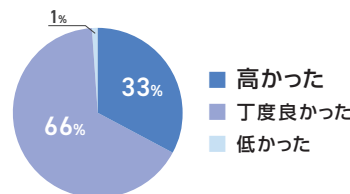
簡単な話ではなかったけど、とても興味深いと感じた。

各講義の概要等、詳細を掲載しています。

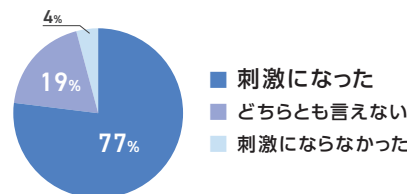
大学入学準備講座：
https://clf.doshisha.ac.jp/clf/preparation_course/course.html

アンケート結果（対面講義参加者分より）

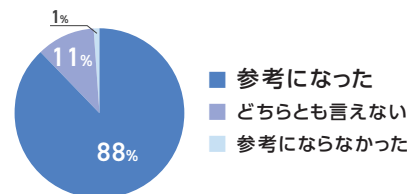
Q.講義のレベルはいかがでしたか？



Q.講義の内容はこれからの高校における勉強の刺激になりましたか？



Q.将来志望する学部を選択する際の参考になりましたか？



2025年度学生調査報告

本学では、入学時点での「入学時調査」、学部1～3年次の秋に「学びの実態調査」、卒業時に「『学びのふり返し』卒業時調査」を実施しています。入学から卒業までの5時点におけるデータを収集し、学生が本学での学びについてどのように感じているか、どのような成長を遂げたかを確認するとともに、それらの結果を本学の教育・研究環境の改善に活用しています。

最新年度の「学びの実態調査」の回答者には、これまでの学生自身の回答と、同学年の全学平均・学部平均とを比較することができるフィードバックをLMS上で行い、入学後の学びの成長実感を確認しながら、次年度以降の履修計画や今後のキャリア形成に活用することを可能にしています。

なお、今年度から、文部科学省主催の「全国学生調査」（学部2年次・4年次生対象）もスタートし、本学も参加しています。学生のみならず、学生によっては負担が増えることになってしまいましたが、多くの学生に協力いただいています。



2025年度に実施した学生調査の実施概要



入学時調査

調査対象 2025年度春学期入学の学部1年次生

実施方法 WEB調査（Microsoft Forms）

回答期間 2025年4月1日（火）～21日（月）

有効回答 4,968件・76.1%
（参考：2024年度 4,055件・63.8%）

調査結果の掲載サイト▶ 

学びの実態調査

調査対象 2025年度学部1～3年次生

実施方法 WEB調査（Microsoft Forms）

回答期間 2025年11月5日（水）～25日（火）

有効回答 1年次生 2,443件・37.3%
（参考：2024年度 1,596件・25.0%）
2年次生 2,141件・33.9%
（参考：2024年度 1,148件・17.9%）
3年次生 1,606件・25.2%
（参考：2024年度 980件・15.5%）

調査結果の掲載サイト▶ 

「学びのふり返し」卒業時調査

調査対象 本調査を実施する学部の2025年度学部卒業生

実施方法 WEB調査（Microsoft Forms）

回答期間 卒業論文提出時期～卒業式当日

* 本調査の実施主体は各学部のため、実施の有無・実施方法・回答期間などの詳細は学部ごとに異なります。

●生成AIの利用状況

生成AIの利活用が社会で急速に進んでいますが、大学教育の現場でも同様です。今年度秋学期の授業や課題に取り組む際に、「生成AI（ChatGPT、Copilot など）を利用する」頻度を尋ねたところ、どの学年も約9割が生成AIを利用していることがわかりました。2023年度の学びの実態調査でも同じ質問をしていましたので、今年度の結果と合わせて入学年度別に回答状況を示したものが図1です。（この質問は、2024年度調査では尋ねていません。）

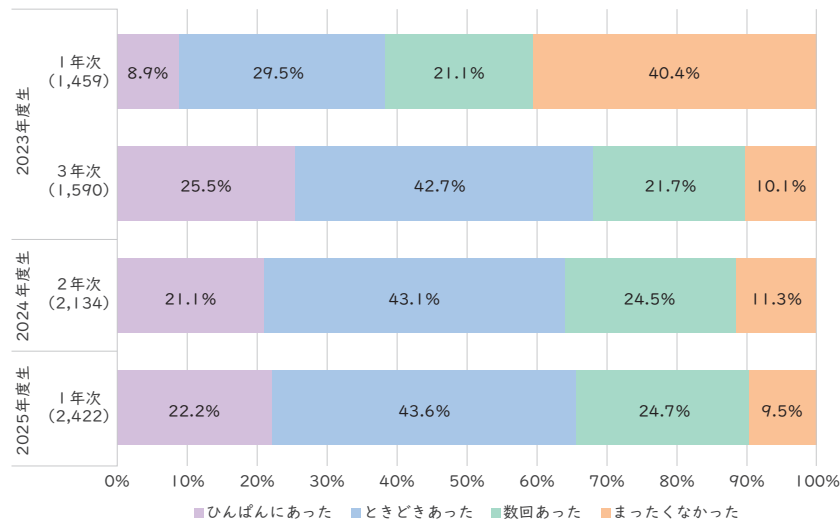


図1 生成AIの利用状況

状況変化がわかる2023年度生の回答をみると、「まったくなかった」が40.4%→10.1%と大幅に減少し、「ひんぱんに利用する」が8.9%→25.5%、「ときどきあった」が29.5%→42.7%と増加しています。あくまでも「授業や課題に」利用しているかどうかという問いではありますが、年度生・年次によらず同様の回答傾向となっていることから、生成AIを日常的に利活用している学生が増えてきていると考えられます。そのため、教育する側としては、「学生は、生成AIを当然の如く利活用している」ことを前提として、学生の思考力・判断力を向上させるための授業設計や課題の指示出しなどについて改めて意識することが重要と考えられます。

●入学から現在までの学びを通じた成長－知識・スキルの獲得度

学生たちは、入学後の学びを経て、どのような成長を遂げているのか、「入学時調査」と「学びの実態調査」のデータから検証しました。集計対象とした質問項目は以下の28項目です。（調査の実施年度や対象学年によって質問項目が若干異なっているため、比較可能なもののみに掲載しています。）

各質問に対する回答を数値化（[学びの実態調査／入学時調査の順に] 身についた／かなり身につけていた＝4、やや身についた／やや身につけていた＝3、あまり身につかなかった／あまり身につけていなかった（2023年度は少し身につけていた）＝2、身につかなかった／身につけていなかった＝1）し、各調査時点における学生個人の合計値を集計しました（最小28ポイント、最高112ポイント）。その結果を利用して、入学年度別に「入学時点で身につけていた知識・スキルの合計値の平均値」と「1～3年次の各時点における、本学での学びをつうじて身につけた知識・能力の合計値の平均値」を学年進行で示したものが図2です。

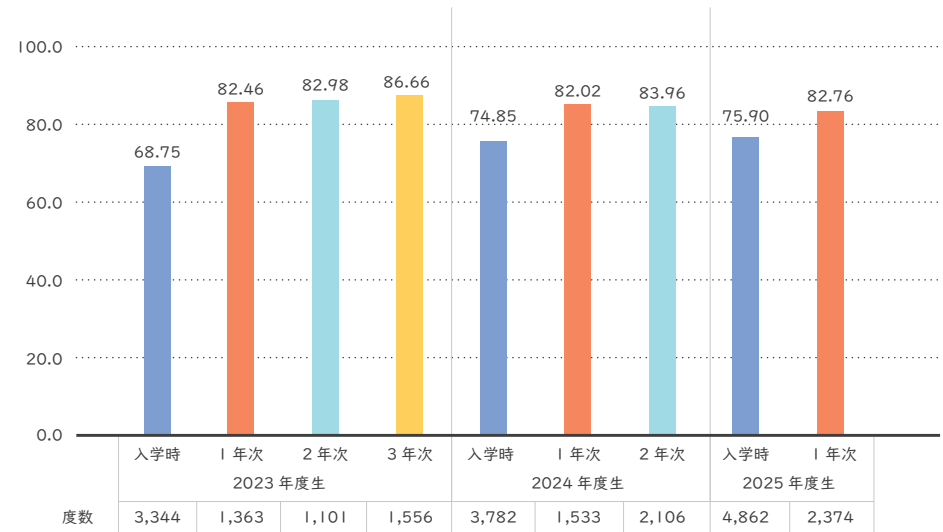


図2 知識・スキルの獲得度

質問項目

- | | | |
|--|--|----------------------|
| 1 授業の重要なポイントをノートにまとめる力 | 10 ものごとの問題点を発見する力 | 19 グローバル化による問題に対する理解 |
| 2 図書館の利用方法や文献を調べる力 | 11 プレゼンテーションの力 | 20 チームワーク |
| 3 パソコンなどを使って文書や資料を作成する力 | 12 自分の意見を筋道立てて主張できる力 | 21 リーダーシップの能力 |
| 4 一般的な教養 | 13 科学的・数量的にものごとを見る力 | 22 人間関係を構築する能力 |
| 5 専攻分野や学科の知識
（入学時調査：現在所属する学科で学ぶ専門分野の専門知識） | 14 ものごとに対して粘り強く取り組む力 | 23 異文化の人々と協力する能力 |
| 6 自分の意見と事実を分けて書く力 | 15 英語の能力 | 24 批判的に考える力 |
| 7 定められた形式に従ってレポートを書く力 | 16 英語以外の外国語（初修外国語）の能力
（入学時調査：英語以外の外国語の能力） | 25 効果的に学習する技能 |
| 8 文献や資料を読んで要点を理解する力 | 17 異文化の人々に関する知識 | 26 自ら考え行動する力 |
| 9 課題を解決する力 | 18 地域社会が直面する問題に対する理解 | 27 日本文化に関する知識 |
| | | 28 コミュニケーション能力 |

これを見ると、2023年度入学生は、入学時68.75→1年次82.46→2年次82.98→3年次86.66となっており、入学時から3年次の秋までの間に約18ポイントの伸びを示しました。また、2024年度入学生は、入学時74.85→1年次82.02→2年次83.96と、入学時以降約9ポイントの伸びを示しています。同様に、2025年度入学生は、入学時75.90→1年次82.76となっており、入学時以降約7ポイントの伸びを示しています。

ここに示した結果は、あくまでも「学びの途中経過」に過ぎません。最終的には、ディプロマ・ポリシーに定められている知識・スキルの水準を卒業時に獲得することが求められています。引き続き、大学での様々な学びをつうじて、着実に成長していくことを切に願います。

本センターとしては、引き続き3つの学生調査を横断的に捉えることにより、学生個人の学びの成長感を確認するとともに、学生がより高い学習成果を得ることができるよう本学の教育改善活動に資するための活動を進めていきます。

学習相談利用状況

図1は今出川良心館ラーニング・コモンズ(LC)にある今出川アカデミックサポートエリア(ASA)、京田辺ラーネッド記念図書館LCにある京田辺ASAにおける、2024年度および2025年度の延べ相談者数を学年ごとに示したものです。どちらの年度も4月から1月までの集計結果ですが、いずれのASAにおいても相談者数は1年次生が最多です。学年が上がるにつれて相談者数は減少傾向ですが、4年次生で相談者数が増加することもあります。なお、京田辺ASAでは2025年度は相談者数が大きく減少しています。このような現状をふまえ、より多くの学生にASAにおける活動を知ってもらえるように、次年度は年度はじめに両校地にて出張相談を行う予定です。

図2、図3はそれぞれ2025年度の1月までの今出川ASAと京田辺ASAに寄せられた相談内容です。今出川ASAではレポートの書き方が多く、次いでその他(DO Week期間のオンデマンド授業の受け方、Officeの使い方、DO-NETの接続方法等)、論文の書き方と続き、多岐にわたる相談が寄せられていることが確認できます。一方、京田辺ASAでは特定の科目の学び方に関する相談が多く寄せられていることから、校地を問わず、学生からの様々な学習相談に幅広く対応できるサポート体制の強化が求められていると言えます。

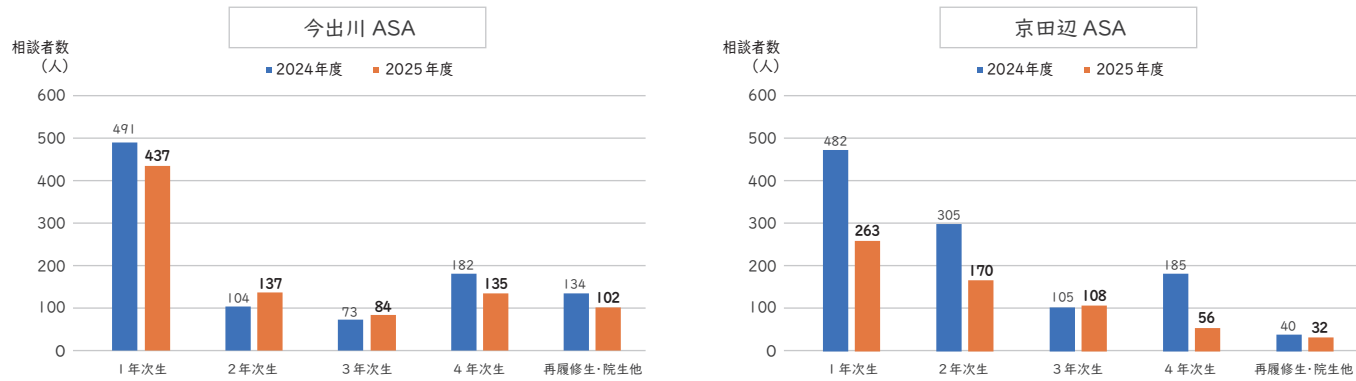


図1 今出川 ASA、京田辺 ASA における延べ相談者数(4月～1月)

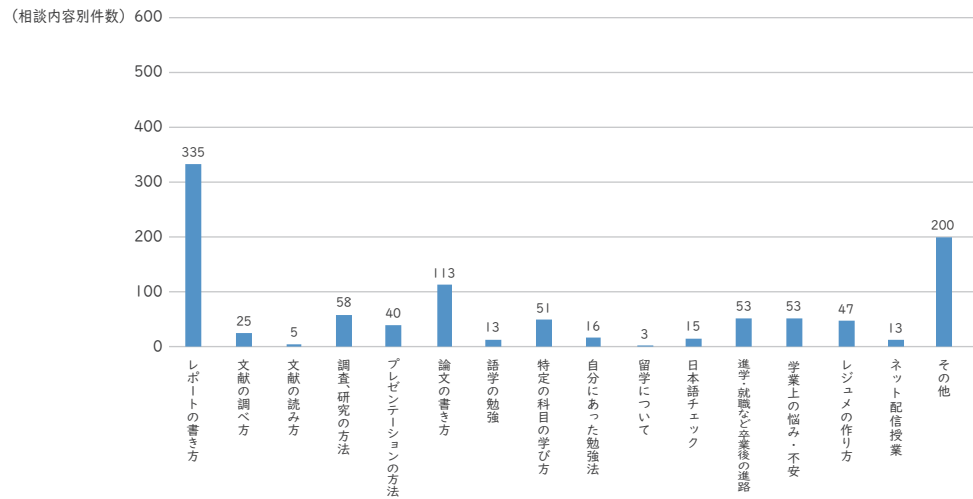


図2 2025年度今出川ASAにおける相談内容別件数(4月～1月)

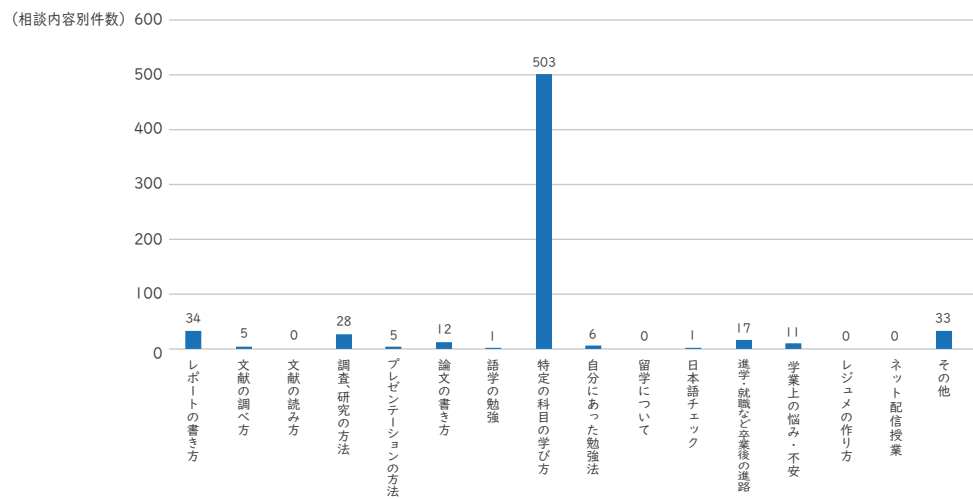


図3 2025年度京田辺ASAにおける相談内容別件数(4月～1月)

施設利用状況

図はすべて2025年4月から2026年1月までの月ごとの利用者数を示しています。図4に示しています、今出川良心館LCの利用者数では、春学期の4月から7月までは利用者数が増加傾向にあります。特に、7月の試験期間に最大の利用者数を示しています。図5は今出川良心館LCにあるグループスタディールームの利用者数です。5月に利用者数は最も多くなり、その後は減少しますが、夏期休暇後の秋学期に再度増加し、その後は減少します。図6は今出川良心館LCにあるインフォダイナー、図7は京田辺ラーネッド記念図書館LCにあるインフォダイナーの利用者数です。こちらも今出川良心館LCの利用状況と同様の傾向を示しています。また、前年度の傾向と比較しても概ね同様の利用傾向であることが分かりました。このことから、今後もこのような利用傾向が予想されます。

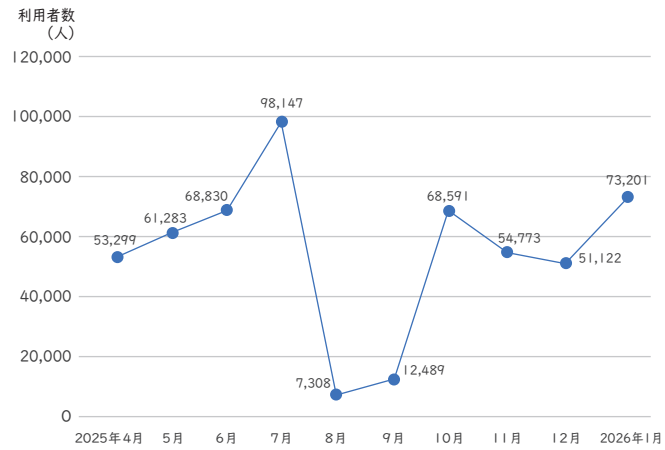


図4 今出川良心館 LC の利用者数

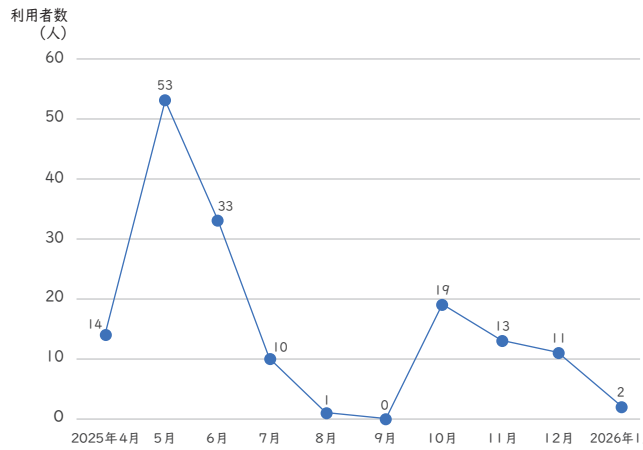


図5 今出川グループスタディールームの利用者数

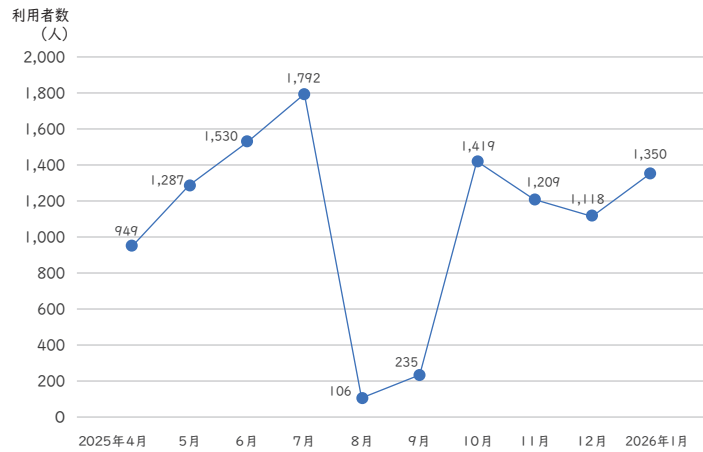


図6 今出川インフォダイナー利用者数

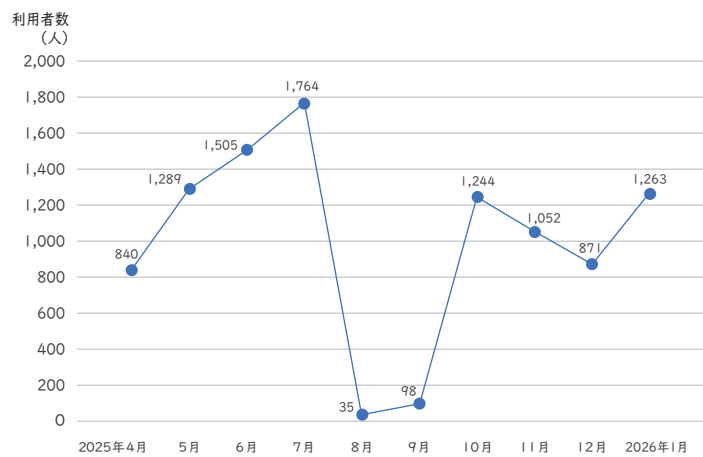


図7 京田辺インフォダイナー利用者数

5年程前に、博士後期課程のとても優秀な学生から、研究成果をまとめた英文論文原稿を受け取りました。元々その学生は英語が上手で、以前から質の高い原稿を提出していました。しかし、そのときの原稿には、これまでとは次元の異なる洗練された英文が書かれており、驚嘆したことを覚えています。この感想を学生本人に伝えたところ、「AI英文ライティング支援ツールを併用しました」と教えてくれました。私自身もその出来栄に感銘を受け、それ以来、同じツールを使っています。AI技術の進歩が加速する中で、普段の生活や大学での研究や学びにおいてもAIが浸透し始めています。

1930年に、英国の著名な経済学者は、「100年後には技術革新による生産性の向上により、人々の労働時間は週15時間程度になるだろう」という予言をしたそうです。1930年の英国では、蒸気機関は工場動力として普及し、その次の物理的技術革新である内燃機関（エンジン）や電動機（モーター）の導入が始まりつつありました。週15時間には程遠いですが、先進国では平均労働時間は過去100年間で減少傾向にあると言われています。

それでは、数年前に突如として現れたデジタル技術革命の象徴とも言える生成AIは、人々にどのような影響を及ぼしていくでしょうか。現時点においても、すでに驚異的な性能をもち、求める情報を短時間で整理し要約してくれるだけでなく、多言語翻訳や画像診断など、かつては人間にしかできないと考えられていた作業を補完しつつあります。人間の能力を拡張する優れたツールであることは間違いありません。一方、産業革命に、公害や所得格差の拡大といった負の側面があったように、生成AIの進歩と普及にも懸念すべき点があります。例えば、生成AIは、従来型の検索エンジンに比べて、数倍から数十倍の電気エネルギーをデータセンターで消費すると言われています。このまま利用が拡大すれば、地球温暖化を加速させる要因となりかねません。この問題に対しても、AI処理の最適化、低消費電力半導体プロセッサ、新しいエネルギー源の開発など、人間にとっても難しいですが、人間にしかできない「創造力」で対処していく他ありません。

大学においても、生成AIをどのように活用するのかを考えることが求められています。そこには、利用者一人ひとりの「良心」が不可欠です。生成AIを利用したことによって得た知識と浮いた時間を、自分自身や周囲の人々の能力や成長に繋がるような創造的な活動に向けて欲しいと思っています。学習支援・教育開発センターとしても、生成AIの進歩がラーニング・コモンズの利用形態や相談内容にどのような変化をもたらすのかを注視し、自学自習を支援する場としての使命を果たし続けられるように対応していきたいと考えています。

学習支援・教育開発センター所長 馬場 吉弘